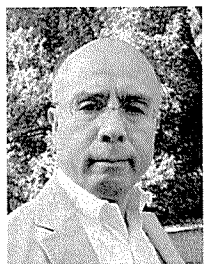


# 視角

## 米大統領就任式の二冊の聖書

雇用、繁栄、国境、テロの根絶を、正義や平等、協調や寛容などよりも優先するトランプ新大統領。就任式も、エイブラハム・リンカンを含む歴代大統領の、人々の融和と国家の統合を語る機会とは、やはり異なるものだった。

国際基督教大学 学務副学長  
森本あんり



「アメリカ第一」で  
得るもの失うもの

2017年1月20日、ドナルド・トランプ氏の大統領就任式を中継で見た。夜が明けても厚い雲に覆われ

ていた首都ワシントンの会場には、就任演説が始まる頃から小雨が降り始めていた。就任時の支持率が4割しかない大統領、60人もの連邦議員が欠席する式典、8年前の半分の観衆で空席が目立つ会場、そして各地に広がる支持者と抗議者の衝突。

世界中が注目する新大統領の演説は、普通なら礼儀正しく前任者の業績に感謝を述べ、将来に向かって人びとの融和と国家の統合を語る機会である。しかし、トランプ氏の演説は既存の政治家たちへの批判に終始し、人びとの怒りを煽るいつもの論

法に満ちていた。

「アメリカ第一」という原則は、必ずしもトランプ氏だけのものではない。公言するかしないかはともかく、

アメリカは常にこの原則でやってきたし、他の国々も本音は同じである。自国を犠牲にしてまで他国を第一にする国など、どこにも存在しない。経

済も外交も軍事も、結局はあるものを得る代わりに別のものを失う交換である。

「アメリカ第一」は、その取引の優先順位が変わった、という宣言にすぎない。背に腹は代えられぬ。新政権は、正義・平等・信頼・尊厳・協調・寛容の代わりに、雇用・繁栄・国境・テロの根絶を優先する。そしてアメリカ国民のほぼ半数が、それを歓迎した。

### 民主主義を祝う式典

就任演説の前に起こったことも、わたしには興味深かった。式典の全体を司ったのは、共和党上院議員のロイ・ブラント氏である。かつて歴史の教師でもあったというブラント氏は、就任式を建国以来の歴史に位



ワシントンの議事堂前で、トランプ氏の大統領就任に反対する女性たちのデモ。2017年1月21日

写真 (HEADLINE) News @amanaimages Inc.

新刊・予約受付中  
3月11日発売

# 「浜とまちのレシピ」80 三陸わかめと昆布

この本は  
東日本大震災後の  
交友で生まれました。  
詳しくは、本誌156〜157頁をご覧ください。  
3月10日までのご注文は、送料小社負担でお送りします。  
B5判/オールカラー/96頁/定価1512円(税込)



注文係直通 ☎03-3971-0102

婦人之友社

婦人之友社 検索

置いて語ったが、注意深く聞くと、そこには新大統領への牽制と忠告が含まれていることがわかる。

彼は、この日アメリカが祝うのは「勝利」ではなく「民主主義」だ、という発言で式典の開始を告げた。選挙戦の勝利者ではなく、政権の円滑な移行を遂げる民主主義という制度を祝っているのである。続けて彼は、この発言が誰に由来するかを明らかにした。リンカン大統領である。

時は1865年、南北戦争の終結も間近になった日、戦争にも選挙にも勝って二期目の就任式に臨んだリンカンだが、自分の勝利を祝うような気配はみじんもなかった。膨大な戦死者を前にして彼が語ったのは、分断された国の両軍が同じ神に祈ったこと、だから両者の祈りがともに聞き届けられるはずがないこと、む

は出てこない。彼にとってリンカンは、「あの時代に凡人が考えられないほどデカイことをやった」人物なのである。彼は、それに自分(の聖書)を重ねて就任宣誓をした。

## ブッシュ氏の苦笑い

最後に、本誌読者のみなさんが暗澹たる思いに沈んでしまわないように、少しでも気分を明るくする出来事にも触れておこう。

全世界が注目するこの荘厳な儀式

しろ神は人間の思いとは異なるご自身の目的を持ち給う、ということであった。

ブラント氏がそこまでリンカンの演説内容に踏み込んで語ったのは、今まさに就任しようとしている新大統領に、「神は自分の味方である」などという思い上がりをするな、と語りかけたかったからだろう。リンカンにとって、神は国家を超越した存在であり、アメリカそのものを審きのもとに置く正義の神であった。もともと、ブラント氏の迂遠な忠告は、トランプ氏の耳には届かなかったようである。その直後に彼は、「アメリカは神に護られる」と連呼していたから。

就任宣誓に際して、トランプ氏は二つの聖書を重ねて用いた。一つはリンカンが一期目の就任式に用いた

の最中に、オバマ氏のすぐ後ろに座っていたジョージ・W・ブッシュ氏は、何とかしてビニールの雨がっぱを着ようとしたりしたが、あまりに不器用なためか、どうしてもうまく広げることができず、しまいにはそれをすっぽり頭から被ってしまった。

ネットには「トランプ氏の就任式に出席しているところを見られるのが恥ずかしくなったのだ」とか、一人で「いないいないばー」をして遊んでいるとか、実に楽しいコメントが満載である。何とか威厳を保とう

聖書であり、もう一つは彼自身が教会の日曜学校を卒業した時に母から贈られた聖書である。

実は、オバマ大統領もリンカンの聖書を就任宣誓に用いている。彼は、一期目はリンカンの聖書を、二期目はそれに加えてキング牧師の聖書を用いて宣誓した。奴隷解放宣言をしたリンカンと、公民権運動の指導者キング牧師。アメリカ史上初の黒人大統領であるオバマ氏にとり、その連関は明白である。彼は、二人の理想に連なるものとして自分の使命を理解していた。

では、トランプ氏はどうか。なぜリンカンの聖書を用いるのか、と訊かれた彼は、「リンカンはあの時代に誰もできなかった偉大なことをしたから」と答えている。黒人の平等や人権などという言葉は、彼の口から

として、いつそうアホらしく見える自分に思わず苦笑いしている彼を見ると、この人も案外いい人だったのかなあ、というホンワカした気分に分れる。小さな幸せの発見である。

そういうえば、『大草原の小さな家』でローラの母さんがいつも言っていた。「大きな損には小さな得」。

1月22日記

もりもとあんり・1956年生まれ。国際基督教大学教授。プロテスタント神学者、アメリカ学者。近著に『反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体』。

